

〔研究ノート〕

中国のことばと文化・社会（一）

文 楚 雄*

社会は生き物である。社会を反映することばも生き物である。ことばは社会の変化や文化などの影響を受けながら、常にその社会の現状を反映し、社会と共に生きる、社会と共に変化していく。ことばは、そのことばが使用されている文化背景や社会と切っても切られない関係にある。ことばは文化や社会を考察する一つの鏡である。ことばを通して、ある社会の長年にわたって蓄積された思想、宗教、価値観、生活様式などの文化及び日々変化している社会を考察することができる。本研究はこのような観点から中国のことばと中国の文化・社会との様々な関わりを考察することになっている。識字啓蒙教育に使われることば、社会変化と共に出現した新語・流行語・流行謡のことば、日常生活に使われている四字連語・熟語のことばを通して、数千年にわたって蓄積されてきた中国の文化及び日々激動している現代中国の社会などを考察することを試みたい。

キーワード：中国文化の伝承，胡錦濤，言語社会学，日本社会言語科学会，甲骨文字，造字法，
意音文字

序

1. ことばは社会と共に生きる

社会は生き物である。社会には様々な集団、様々な言語、様々な文化、様々な変化がある。社会を反映することばも生き物である。ことばは社会の変化や文化などの影響を受けながら、常にその社会の変化や文化の現状などを反映し、社会と共に生きる、社会と共に変化していく。ことばは、そのことばが使用されている文化背景や社会と切っても切られない関係にあ

る。ことばは文化や社会を考察する一つの鏡である。ことばを通して、ある社会の長年にわたって蓄積された生活様式や価値観などの文化及び日々変化している社会を考察することができる。本研究はこのような観点から中国のことばと中国の文化・社会との様々な関わりを考察する。中国のことばを通して、数千年にわたって蓄積されてきた中国の文化及び日々激動している現代中国の社会などを考察することを試みたい。

伝統的には言語と文化と社会とは別々の学問分野として扱われている。ことばは言語学の分野で、文化は文化学の分野で、社会は社会学の

* 立命館大学産業社会学部教授

分野で研究する。社会学者は主にある事象の傾向を探求し、文化学者は主にある集団・社会の特有の個性を研究し、言語学者は主にある言語の完璧な規則性を追及する傾向にある。文化・社会と言語との相互関係についてはあまり考えない。しかし、ある言語の理解は、その言語が使用されている文化や社会の理解と切っても切れない関係にある。言語の研究はその言語の文化的、社会的要因と切り離して言語だけを考えるのが不十分である。思想、宗教、価値観、階級、発想、生活様式、性別、年齢など、さまざまな文化的、社会的な要因が、個別言語の構造や実際の言語使用の上で、かなりの違いとして現れてくる。言葉の表現や変化はかなり文化的、社会的な要因が入ってくる。ことばを通して、ある社会の変化及びその社会の文化的な要因を考察することもできる。

2. 中国のことばから見た中国の文化

ことばにはそのことばを話す国、地域の人々の政治、思想、歴史、宗教、価値観、慣習、生活様式などの背景がある。ことばを通してそのことばに潜んでいる文化や社会を知ることができる。中国のことばを通して中国の文化や中国の社会を考察することができる。本研究はこのような視点から中国語の日常生活に使われている四字連語・熟語などのことばや漢字啓蒙教育に使われることばなどを取上げ、これらのことばに潜んでいる文化的社会的な背景などを分析し、ことばから見た中国文化の特徴などを考察したい。

漢字啓蒙教育に使われることばの場合を見よう。

ご承知のように中国語は漢字ばかりだ。漢字の数は6万とも8万とも言われている。これら

の漢字を全部覚えるのは恐らく一生涯かかるだろう。従って漢字の教育は中国人にとって極めて重要な課題である。しかし、一般の人々は8万と言われているこれらの漢字を全部覚えるのは基本的には不可能である。たとえこれらの漢字を全部覚えたとしても、はたして意味があるのだろうか。6万8万と言われている漢字の中に異体字がかなり含まれている。これらの異体字などの漢字は普段あまり使われていないのである。日常的な読み書き、コミュニケーションなどに実際によく使われる漢字はそれほど多くない。大体3500字程度である。この3500字を覚えれば良いのである。しかし、3500字を覚えるのもそう簡単なことではない。如何に早くこの3500字の漢字を覚えるかが極めて重要である。啓蒙の場合でも最低その中の1000字ぐらいを覚えなければならない。従って常用漢字の教育は中国人にとって大きな課題である。歴史上の教育者達はこの課題にたゆまぬ努力をしてきた。教材の開発も研究も行われてきた。その中に千年以上立っても評価し続け、販売量も衰えない代表的な漢字啓蒙教育のテキストがある。一つは『千字文』で、もう一つは『三字経』である。『千字文』は西暦500年代の梁の周興嗣が作ったもので、『三字経』は西暦1200年代の宋の王応麟が作ったものである。『千字文』は王羲之の書から一千字を取り出し、4字1句で、250句から構成されている。『三字経』は3字で1句、6字で一区切り、全部で1128字となっている。特に『三字経』には中国の思想、倫理道德、歴史などの文化的なものが豊富に含まれている。1000年来中国で最もよく売っていた本はこの『三字経』、『千字文』であると言われている。これは『三字経』が三字一句の上に韻も踏んでいるので、覚えやすい構造となっ

ているからである。この覚えやすい良さは評価されてきた最大の理由であると思う。しかし、本研究は『三字経』、『千字文』の覚えやすさなどについて分析するのではなく、『三字経』、『千字文』などに使われていることばについて分析するのである。『三字経』、『千字文』などの識字教育教材が中国文化の伝承や植付けにどれだけの影響を及ぼし、どれだけの役割を果たしたかを見ていきたいと考えている。この考察を通して、ことばと文化との関わりや中国文化の特徴などを明らかにすることを試みたい。

識字教育教材に使われることばは単なる漢字習得のためのことばだけではない。それらのことばに中国人の思想、価値観、歴史、文化、伝統などが含まれている。啓蒙教育の漢字を習得すると同時に、漢字習得に使われることばに潜んでいる思想、価値観、文化なども知らず知らずのうちに伝承され、植え付けられるのである。漢字啓蒙教育に使われることばは濃厚な文化の背景があるのである。従って、漢字啓蒙教育にどのようなことばを使うか、使われることばによって何を伝え、何を伝承させ、何を植え付けようとするのかは大きな課題である。ところが、啓蒙教育に使われていることばが中国文化の伝承や植付けへの影響や役割については、これまでにあまり議論されてこなかった。人々の注目点は主としてどのぐらいの漢字を教えるのか、どのようにして早く漢字が覚えられるのか、といったような漢字選定の問題や漢字習得法の問題ばかりに置いた。啓蒙教育に使われることばによって思想的に文化的に人間の形成にどれだけ影響を与えているのかが見え隠れている。私は漢字啓蒙教育に使われることばは中国の思想、文化などの伝承に多大な影響を与え、多大な役割を果たしていると考え。中国人の社会

は、中国本土であろう、海を隔てた外国であろう、中国の文化が絶えることなく延々と継承されている。それはなぜか。私は啓蒙教育に使われていることばと深く関係していると考えている。啓蒙教育に使われていることばが中国文化の伝承や植付けに多大な影響や役割を果たしていると考えている。本研究はこのような視点から中国のことばを通して中国の文化や社会を見ていきたい。漢字啓蒙教育に使われることば或いは日常生活に使われる四字連語・熟語などのことばを取上げ、そこに潜んでいる思想、価値観、歴史、文化などの問題を分析する。

3. 中国のことばから見た中国の社会

ことばを通して中国社会の変化や動向などを見ることができる。この論文を執筆している最中に中国にはこれまでの人類社会の誰も経験していなかった新型肺炎が出現し、2020年2月に北京での感染者が現れ、3月からは猛威を振るい、一時中国全土更に全世界に広がるのではないかと騒ぎ、人々に大きな脅威を与えた。世界のマスコミは、中国医療衛生当局、北京市政府の対応及び感染者数の隠蔽作業に対して厳しい批判を浴びた。この新型肺炎の出現と世界のマスコミからの批判は、3月にスタートしたばかりの胡錦涛国家主席、温家宝首相の中国政府の新体制にとって思いもよらない困難な局面をもたらした。新型肺炎の対応を下手にすれば新体制の責任問題までに発展するかもしれないというような厳しい局面となっていた。胡錦涛新体制は4月の中旬から新型肺炎対応の方針を大きく転換させ、これまでに少なめに公表されていた北京市の感染者数40人を4月20日に8倍以上の339人に上方修正して発表し、中国の衛生相・張文康と北京市長・孟学農を感染者数

の隠蔽作業の責任で解任させ、新型肺炎との戦いを本格的にスタートさせた。この一連の異例とも言える胡錦濤新体制の迅速な対応は中国の国民に評価され、世界の人々にも驚きを与えた。胡錦濤新体制への評価として、北京大学の学生達には、「胡哥挺住！」（胡錦濤兄貴、頑張れ！）ということばが現れ、たちまち流行となった。「胡哥挺住！」ということば自身は文法的にも構造的にも意味的にも何も難しいことがなく、ごく普通の主語・述語の文である。しかし、3月に就任したばかりの国家元首としての胡錦濤に当てはめ、思いもよらない新型肺炎の被害を蒙っている胡錦濤新体制に当てはめると、もう普通のことばではなくなり、非常に複雑な政治的社会的要素が含まれ、人間関係や権力闘争の匂いを匂わせ、大変興味深いことばとなるのである。このことばを通して中国社会の一側面を観察することができる。

胡錦濤、1942年12月生まれ、60歳。2002年11月に中国共産党第16回の党大会で党の総書記に選出され、2003年3月に第10期全国人民代表大会で国家元首に当たる中華人民共和国国家主席に就任した。76歳の前党総書記、国家主席の江沢民からの禅譲である。これにより中国の最高指導部の若返りが実現し、人々はこの若返りを歓迎し、新指導部に期待を掛けていた。ところが、党総書記に就任して4ヶ月、国家主席に就任して1ヶ月も経たない内に、この新型肺炎が出現し、猛威を振るい、思いもよらない大きな被害を出しているのである。4月中旬から北京市の感染者が一日かなりの数で増えているのに、衛生部当局の正式の発表では4月16日までの累計で僅か40人しかなかったと公表し、マスコミは中国政府に対して強い不信感を抱いた。恐らく胡錦濤は新型肺炎事態の重大さ

が感じられ、うそ報告の風潮に何とかして歯止めを掛けなければならないと感じたのだろう。しかし、就任したばかりの胡錦濤は長老政治の伝統がある中国では果たしてできるのだろうか。

4月14日胡錦濤は新型肺炎の最初の発生地である広東省広州市に乗り入れ、新型肺炎の治療、研究に奮闘している広東省疾病予防センターを視察した。北京に戻り、17日に党の政治局常務委員会会議を招集し、新型肺炎について討議した。その結果、これまでの方針を大きく転換させ、張文康・衛生相及び孟學農・北京市長を解任させ、20日の発表では北京市の感染者数はこれまでの発表の8倍以上にも上方修正した。胡錦濤の行動は国民から支持され、評判が良かった。しかし、胡錦濤の決断は果たして長老政治家達に支持されたのだろうか。支持されたところか、かなりの抵抗があったに違いない。張文康・衛生相は退任したばかりの前国家主席江沢民から厚い信頼を得た人物の一人だから、解任の結論に至るまでには相当の議論や抵抗があったに違いない。それでも張文康・衛生相を切ってしまったのである。胡錦濤のこの決断は長老政治家達の恨みを買ったに違いない。胡錦濤の立場がかなり難しくなり、場合によっては引きおろされるかもしれない。中国の民衆は胡錦濤を支持し、胡錦濤に対し、抵抗勢力に負けずに最後まで戦ってほしいという応援を送りたい。このような社会的政治的背景があって、北京大学の学生達は民衆達の願いをこめて「胡哥挺住！」のことばを作ったのだと思う。このことばを通して中国社会の構造や民衆の意向や権力闘争の傾向などの一側面が分る。

この20数年の中国の社会だけを見ても、鄧小平をはじめとする長老政治家達に引き下ろされた人物は三人もいる。一人は華国鋒だ。かれ

は毛沢東が逝去直前に指定した後継者である。毛沢東死去後に順当に中国のナンバーワンになったが、長老の鄧小平の復活に従い、権力の基盤が弱まり、終には5年で引きおろされてしまった。華国鋒の後任は胡耀邦だ。胡耀邦は81年に華国鋒の辞任により党の主席に就任した。党の「主席」の名称は82年に「総書記」に変更したが、三代目の党の主席だ。有能な若手リーダーなので、2期10年は大丈夫だと見られていたが、86年の学生民主化運動支持の責任で87年に思いもよらずに長老政治家達に辞任に追い込まれた。4代目の党のナンバーワンに就任したのは趙紫陽だ。趙紫陽も思いもよらずに僅か2年で、89年の天安門学生民主化運動の責任で解任されてしまった。89年5代目の党のナンバーワンに就任したのは江沢民だ。江沢民を押しした院政の鄧小平はその年もう85歳の高齢になっていた。終に4人目の引きおろしはせず、97年にこの世を去った。鄧小平は江沢民を引きおろそうと考えたかどうかは不明であるが、江沢民を党のナンバーワンに就任させた3年目の92年に、49歳の若手のリーダー胡錦濤を党の政治局常務委員に抜擢した。明らかにポスト江沢民の党の後継者として指定したのである。胡錦濤は2002年11月に第16回党大会で順当に6代目の党のナンバーワンに就任したわけである。2003年3月に国家元首に当たる国家主席に選出されたのである。しかし、4月の新型肺炎で長老江沢民派閥の衛生大臣を容赦なく切ってしまった。胡錦濤は恨みを買って大丈夫なのだろうか。果たして引きおろされないのだろうか。民衆は2代目、3代目、4代目の悲劇を考えると、大変心配なのである。当然、江沢民は鄧小平のようなカリスマを持っているわけではない。鄧小平のように思うままに政治

を操ることができない。しかし、鄧小平のようなカリスマの人物がいない今は名実とも長老として君臨しているのである。党のナンバーワンと国家主席のポストからは引退したが、完全ではない。党の軍事委員会主席のポストに留任している。更に政治局常務委員会に自派閥の上海組の人を4人も送り込んで、胡錦濤の日常の仕事ぶりを監視するような体制を敷いた。このような歴史的・政治的背景がある中でこの怖い新型肺炎の災害が出現した。民衆は胡錦濤の行動に支持と期待の気持ちを込めて、「胡哥挺住！」（胡錦濤兄貴、頑張れ！）ということばを作り出したのである。このようにこのことばを通して中国社会の複雑な背景などを考察することができる。

4. 言語社会学と社会言語学

言語の研究においては、50、60年代頃にはチョムスキーの生成文法学の出現により構造主義言語学がアメリカを中心に大流行し、言語を社会的なコンテクストに依存せず言語の構造だけを研究しようとする方向に走っていた。一方、この構造主義の大流行に対抗して、アメリカの社会言語学者達は60年代の後半から70年代の前半に言語の研究を社会的なコンテクストの中で行うべきだと主張し、このような研究を行う時の研究理論や手法などを大きく発展させ、構造主義と対抗できるような基礎を作った。真田信治の『社会言語学』¹⁾によれば、科学としての社会言語学の史的発展過程を、60年代の黎明期、70年代の確立期、80年代の発展期に分けることができると述べている。

一方、言語学と社会言語学の違いについて、R.Aハドソンの『社会言語学』²⁾では「言語学は言語の構造だけを考え、言語が習得・使用

される社会状況を考慮しないという点で社会言語学とは違う」と述べている。一般的には言語と社会・文化との関わりを研究する学問を、「Sociolinguistics（社会言語学）」或いは「the Sociology of Language（言語社会学）」の名称で呼ぶようにしている。言語と文化・社会との関わりを研究する点においては、「社会言語学」も「言語社会学」も同じである。しかし、「社会言語学」と「言語社会学」はそれぞれ研究の重点が違う。Sociolinguistics（社会言語学）は言語学の方に重点が置かれている。the Sociology of Language（言語社会学）はどちらかといえば、社会学の方に重点が置かれている。R.Aハドソンによれば、社会言語学は「社会に関連して言語を研究すること」、言語社会学は「言語に関連して社会を研究すること」³⁾と定義している。このように「社会言語学」と「言語社会学」の二つの名称を厳密に区別している。

しかし、R.Aハドソンのように二つの名称を厳密に区別して使うにしろ、両方を曖昧にして広義で言語社会学も社会言語学の同語として使うにしろ、言語の研究を社会的なコンテキストの中で行うのが同じである。言語と文化・社会との関わりを研究の内容とするのも同じである。本研究はまさにこのような視点でことばと文化・社会との関わりを研究し、ことばを通して文化・社会を考察することをやりたいと考えている。

5. 言語と文化・社会との関わり研究

日本では既存の言語学、社会学、文化学などのような伝統的な学問分野が重視され、言語と社会との相互関係を考える新しい学問分野としての社会言語学をスタートさせたのが極最近のことである。1994年に徳川宗賢、井出祥子、

井上史雄らによって日本「社会言語学研究会」が組織され、1998年1月に漸く日本「社会言語科学会」へと発展してきた。英語の名称は Japanese Association of the Sociolinguistic Sciences (JASS) となっている。本学会発足の趣旨や初代会長の発足の挨拶⁴⁾によれば、「本学会は言語・コミュニケーションを人間・文化・社会との関わりにおいて取り上げそこに存在する課題の解明を目指す。既成の学問領域を立脚点としつつ、その枠を越えて、関連領域の研究者との交流を通じ、その刺激と緊張を原動力として前進していきたいと考えている。」、「われわれは、その人類社会を形成するファクターとして、人間相互のコミュニケーション、あるいは言語の機能を特に重視します。このことは、われわれが、言語またコミュニケーションを、人間・社会・文化との関わりにおいてとりあげ、そこに存在す問題の解明をめざすといってもいいでしょう。われわれは現代社会に内在する諸問題に、幅広く注目していきたいと思うのです。こうした観点からの研究が、いままでもなかったわけではありません。しかし先輩たちが築いてきた学問領域のみでは、かならずしも対応しきれないと感じられるのです。学問間の連携を進め、新しい出発が必要だと思われま。ここに「社会言語科学会」を創設する根拠があります。」と述べている。学会誌としては『社会言語科学』が創刊された。その後1999年5月に、三元社より『ことばと社会』という雑誌が創刊され、この雑誌のめざすものについて、雑誌のご案内には「社会的な言語問題を学際的に論ずる！言語をとりまく政治性・権力性を射程に入れた、あたらしい言語文化研究誌の誕生です」⁵⁾と書いてある。創刊号には次のようなことを述べている。近代国家への反省から「多

文化主義・多言語主義が語られる」ようになりましたが、「その具体像は依然としておぼろげなままだ。それを究明することが私達の課題である。」「ことばのマイノリティの権利が擁護され、複数の言語、各種の雑多な言語が共存できる社会への可能性をさぐる」⁶⁾ことを課題として、本誌は創刊されました。2001年8月に大阪大学言語文化学部の編集責任で『社会言語学』という雑誌が創刊された。

言葉と文化との関わりについての研究も同じ状況である。70年代から80年代前半までは「言語と文化」などで名づけられた研究紀要としては75年創刊の阪大の『言語文化研究』と、80年創刊の名古屋大の『言語文化論集』の僅か二件しかなかったが、一気に増えてきたのはやはり90年代に入ってからである。代表的なものとしては、89年創刊の立命館大の『言語文化研究』、90年創刊の九州大の『言語文化論集』、92年創刊の阪大の『言語文化学』、98年創刊の文教大の『言語と文化』、98年創刊の同志社大の『言語文化』、99年創刊の愛知大の『言語と文化』、2000年創刊の名古屋大の『ことばと文化』などがある。「言語と文化」などで名づけた学会としては、個別大学所属レベルのものが幾つかある。例えば、阪大の「言語文化学会」や同志社大の「言語文化学会」や大阪教育大の「日本アジア言語文化学会」などがある。しかし、全国的な規模の学会としてはいまだに成立していないのが現状である。このように言語と文化との関わりを研究する言語文化学(linguisticulture)としても歴史の浅い分野なのである。

6. 中国のことばと文化・社会についての研究

日本における中国のことばと文化・社会との

関わりについての研究も、前に述べたような全体の言語と文化・社会との関わりの研究状況の中にあるものだから、当然、状況が同じで、独立した学会までには成長していないのである。中国の言語・文化・社会・政治・歴史・文学など中国全体を研究する伝統のある大きな学会がある。「日本中国学会」、「東方学会」、「日本中国語学会」などがその代表である。しかし、言語と文化・社会との関わりについての研究を独立の研究分野としての学会は未だに成立していないのが現状である。

中国国内においても、言語と文化・社会との関わりについての研究はほぼ日本と同様に80年代に始まり、90年代になってから増えてきたのである。50、60年代には、世界の構造主義流行及び中国の政治的体制などの影響で中国も構造主義的な研究が流行していた。言語研究は社会や文化などと結び付けずに言語の内部構造だけを研究の対象とし、社会的文化的な要因を視野に入れない純言語学的な研究をしていたのである。当時の政治的社会的な環境を考えると、研究者にとっては無難の方法であるかも知れない。このような純言語学的な研究成果は当然肯定すべきである。しかし、言語は生き物だから、社会と共に生きる。社会と共に変化する。社会や文化と切り離して内部構造だけを研究するのは偏りすぎであり、不十分である。80年代から中国の政治的な体制や政策が大きく変わり、市場経済も導入され、外国との交流も頻繁に行われ、研究活動も活発且つ多様化になってきた。言語の研究も世界の潮流に従い、言語の内部構造だけに止まらず、多角的、多面的、多分野的に研究し始めた。言語と文化・社会との関わりでの研究も始められ、研究成果の出版物も多数見られた。その初期の代表的なものとし

ては、1983年出版の陳原の『社会言語学』⁷⁾と1985年出版の陳松嶺の『社会言語学導論』⁸⁾があげられる。陳原の本の中でいち早く言語が社会と共に変化するという概念を中国国内に取り入れた。その後陳原は92年に『中国のことばと社会』⁹⁾の本を出版した。この本の中では125のことばを取上げ、これらのことばが使われる社会的な背景などを述べた。本のまえがきに書いたように出版のきっかけは88～90年にかけて『読書』という発行部数のとても多い雑誌に百語の新語を取り出し、その新語から見た中国社会の変動などをエッセイの形で連載したところ、思いがけない読者の関心や共感を得たという。陳建民は99年に「言語は社会と共に変化する」、「言語は文化と共に共存する」、「言語と市場経済との関わり」の章を立てて、『中国の言語と中国の社会』¹⁰⁾の本を出版した。

一方、言語と文化との関わりについての研究も「文化言語学」という名称も80年代になってから盛んになってきたのである。また、90年代には中国の大学では「中国語と中国の文化」という選択科目も開設され、教材も開発された。例えば、アモイ大学が開発した教材『中国語と中国の文化』¹¹⁾はその一例である。80年代、90年代、中国に於ける中国の言語と文化との関わりについての研究書は次のようなものがある。游汝傑の『方言と中国文化』86年、羅常培の『言語と文化』89年、陳建民の『言語・文化・社会の新探』89年、刑福義の『文化言語学』90年、申小龍の『中国文化言語学』90年、郭錦桴の『中国語と中国の伝統文化』93年、常敬宇の『中国語の語彙と文化』95年、張紹滔の『中国語と文化の研究』96年などが¹²⁾その代表的なものである。

第1部 中国文化の伝承と漢字

第1章 漢字の成立と文化の伝承

第1節 漢字成立の伝説

中国語の漢字は増え続けてきた。86年に出版した《漢字大字典》¹³⁾には60000余字を収録している。最新の《中華字海》¹⁴⁾は何と85000字も収録している。この何万もある中国語の漢字は何時、どのように成立したのだろうか。成立に関わる伝説が様々あるが、代表的なものは次のようなものがある。

1、蒼頡創字説

蒼頡創字説は中国の春秋戦国の時代から伝えられてきた伝説である。多くの古い書籍にこの伝説を記録している。《漢字文化漫談》¹⁵⁾によれば、《荀子・解蔽篇》には「古者好書者衆矣、而蒼頡独伝者、壹也」の記載があり、《呂氏春秋・君守》には「奚仲作車、蒼頡作書、后稷作稼……此六人者所作、当也」の記載がある。《韓非子・五蠹》には「古者蒼頡之作書也」、李斯の《蒼頡篇》には「蒼頡作書、以教后嗣」の記載があり、許慎の《説文解字》¹⁶⁾には「黄帝之史蒼頡、見鳥獸蹄之迹、知分理之可相別異也、初作書契」の記述がある。蒼頡という人物が「書(文字)」が好きで、「書」を作ったのがこれらの記載の共通点である。蒼頡という人物は本当に存在したのだろうか。学者達の見方が分かれている。蒼頡という人物は実際には存在せず、「蒼頡」は「創契」の音便だろうという説もあれば、蒼頡という人物は実際に存在し、帝の官吏か若しくは本人が帝かという説もある。

蒼頡は実際に存在したかどうかの論争が暫く続きそうだが、蒼頡説はかなり一般的に知られ、引用もよくされている。特に二千年前の許慎が

作った《説文解字》の「帝の官吏蒼頡は鳥や動物の足跡を見て、ヒントを得て漢字を造った」という記載は面白い。《説文解字》は中国で最も古くて信頼のある字典で、収録の漢字は10516字にも上っている。

2, 結縄説

結縄は縄を結び、その結んだ数や大きさで物事の数などを記録するのである。中国の少数民族トールン族やハニ族が、長期外出時の日日の記録や田んぼ売買時の価格の記録に最近まで使われていたそうである。しかし、結縄は決して中国だけが使ったものではなく、他の国や地域にも古代に使われていた記録方法の一つである。中国語の漢字はこの結縄の方法から生まれたのだと伝えられているが、しかし、結縄の方法は数字を表すことに役に立つにしても、文字として使う役割が非常に限定的である。結縄説を疑う人がいる。

3, 八卦説

八卦とは、中国古代の帝王伏羲が考え出したのだと伝えられているが、自然界のすべての自然現象及び人間社会のすべての現象を、例えば、春夏秋冬の季節や赤緑黄黒の色や東西南北の方向や酸甘苦辛の味や人間の臓器など、八種類の象に分類して説明する学問体系である。卜筮者達はこの八卦の体系を使って自然界や人間社会の未来に対し、占いを行う。亀甲を焼き、焼いた後の亀甲のひび割れの形状を見て未来の吉凶を占う。中国の漢字はこの八卦を用いた占いかから生まれたのだと伝えられている。

4, 絵画説

最近は多くの学者は、中国語の漢字が古代部族のトーテムの動物・植物や絵画などからヒントを得て造られたのだと考えている人がいる。一方、トーテムの動物・植物や絵画はあくまで

絵画であって、文字そのものではない。絵画は文字の前身に過ぎないと考えている人が今多数を占める。

第2節 漢字の発達

1, 甲骨文字

中国の漢字は4000年近い歴史を持つ。現存する最古の漢字は3600年前に亀の甲羅や牛の骨に刻んだ甲骨文字である。甲骨文字の存在は100年くらい前までは知らなかった。1899年に始めて分ったのである。偶然に発見されたのである。1899年に王懿栄¹⁷⁾という学者は北京の漢方薬屋で漢方薬を買った。中には「龍骨」という薬があった。「龍骨」は本当の龍の骨ではなく、亀の甲羅や動物の骨なのである。王懿栄は買ってきた漢方薬「龍骨」の表面に文字が刻まれていることを偶然に発見し、調べていくと、この「龍骨」は河南省安陽から運ばれてきたことが分かった。安陽の農民達は畑から古い亀の甲羅を発見し、それを「龍骨」として漢方薬屋に売る。漢方薬屋はこの「龍骨」を漢方薬として患者に売る。王懿栄の漢方薬にも「龍骨」が入っていた。そして「龍骨」に文字が刻まれていることを偶然に発見し、甲骨文字の存在は始めて世に知られた。その後、劉鶚という学者はさらに大量な甲骨を集め、やがて1903年に5000点以上の甲骨の中から、文字が比較的鮮明なもの千点あまりを選んで拓本に取り、「鉄雲蔵亀」¹⁸⁾という名で公開し、解読も行われた。

河南省安陽県の殷墟村から出土した甲骨文字は累計で15万点に上り、発見された個々の文字は4500くらい字に達しており、解読された文字は2000余字となっている。文字の構成上の違いから五期に分類される。第一期は雄偉、第二期は謹飭、第三期は頽靡、第四期は勁峭、

第五期は厳整と分類される。古い物ほど筆跡が大きく雄飛であり、新しい物ほど筆跡は小さく整っている。甲骨文字は中国の最古の文字、原始的な象形文字というイメージが強いが、しかし、象形、会意、形声、指事、転注、仮借といった高度な用法が用いられており、文字としては原始的とは言い切れないほどに成熟している。従って甲骨文字の先祖とも言うべき文字が、もっと古い時代に存在するかもしれないと言われている

現在発見されている甲骨文字は、殷の二十三代目の王・武丁以降のものばかりであるが、中国古代史の研究には欠くことの出来ない貴重な資料である。殷は宗教的な色彩の濃い王朝であり、政治や軍事などが占いによって決定されていたと言われている。甲骨文字は主に占いのため使われていた。王様が農業生産、祭祀、戦争など重要な事柄を神に問うために、亀の甲羅や牛の骨を焼く。熱を加えると、亀甲や骨の表面には線状のひび割れが走る。そのひび割れの形を見て吉凶を判断する。占って得た結果を亀甲や骨に刻む。刻んだ文字が「甲骨文字」といい、刻んだ文章は「卜辞」と言う。

甲骨文字は現存の最も古い文字であるが、三千年以前の殷の時代には刻みよりも筆が一般的に使われ、筆で書いた文字は一般的だと考えられる。亀甲や骨に刻んだ文字はむしろ特殊な文字で、刻んだ内容も特殊な分野だと考えられる。しかし、筆で書いた文字は未だに発見されていない。筆の文字は保存できなかったからだろう。保存できたのは堅い材質の亀の甲羅や牛の骨であった。

2, 金文

これまでに発掘された甲骨文字は商殷時代の中後期大体紀元前14世紀から11世紀までの間

に使われていた文字である。商殷時代の次は西周、春秋、戦国、秦、漢の時代が続くが、金文は甲骨文字からやや遅れて、殷墟の中期頃から使われ、西周、春秋、戦国、秦、漢の時代まで使い続けた。金文とは銅などの金属で作った容器・兵器・貨幣・印章などに鑄出したり刻み付けたりされた文字のことである。殷周時代の人びとは、官職に任命されたり、戦で功績を挙げたりして王から褒美を頂くと、そのことを青銅製の鼎や鐘といった器に記録して、祭祀や儀式の際に使用した。当時「金」は現在の「Gold」ではなく、「銅」或いは銅に錫を混ぜて堅くした「青銅」をあらわす言葉であり、青銅器に鑄込んだり刻んだりした銘文のことを「金文」と呼ぶ。代表的な器は鼎や鐘なので、その形態から「鐘鼎文」とも呼ばれる

金文の文字構造は甲骨文によく似ているが、字が細長く、大きさも様々であるのが甲骨文字の特徴である。これに対して、金文は、字の線状が太く、円やかで、大きさも整っているのが特徴である。初期の金文は全文が短いのも特徴の一つである。しかし、西周の後期には金文の全文が長くなり、例えば、「毛公鼎」¹⁹⁾には497文字も鑄込まれていた。殷が滅びた後の西周時代（紀元前11世紀から紀元前770年まで）は金文の全盛期とされる。西周時代には甲骨文字は姿を消していた。

青銅器に記録した金文の内容は様々であるが、大体九種類に分類することができる。その一は分封を記す金文、その二は器主の功績を記す金文、その三は戦争などの征伐を記す金文、その四は祭祀を記す金文、その五は任命や官爵に関する冊命を記す金文、その六は土地の交換や生産物の取引の経過を記す金文、その七は刑罰などの法律を記す金文、その八は婚姻関係を

結ぶ経過を記す金文、その九は戒めの言葉を記す金文²⁰⁾である。

青銅器は用途により、調理器、食器、酒器、水器、楽器、兵器、車馬器、工具器、雑器の九種類に分類することができる。

3, 秦の文字統一

西周時代の次は春秋戦国時代になるが、この時代は政治的には群雄割拠の状態が続いた。文字も各地で独自の発展を遂げ、分裂の様相を呈していた。紀元前221年、秦は500年に及ぶ戦乱の時代を終わらせ、天下を統一した。秦王政が自ら「皇帝」と称し、中国を支配する唯一の統制者であることを確立した。国内統治するため、度量衡の統一と全国共通の文字を定め、地方色の強い文字の使用を禁止し、秦の文字である篆書や隸書を全国隅々まで使用するよう強制した。当時、秦の地方で使われた書体は大篆であったが、字画が複雑で書くには不便であったので、丞相李斯は始皇帝に命じられ、大篆を改良して新しい書体「小篆」を作成した。しかし、この「小篆」も曲線が多すぎた。大量の役所の文書を処理するにはあまりにも手間がかかり、実用に適するものではなかった。そこで直線を基準としたより効率的な実用書体である「隸書」が役所の事務処理に用いられるようになった。許慎の《説文解字》には次のような記述がある。「是時秦焼滅經書，滌除旧典，大発吏卒興戎役，官獄職務繁，初有隸書以趨約易，而古文由此絶也。」(このとき、秦は經書を焼き滅ぼし、古典を取り除き、反抗者を国境警備や労役に送るため、官吏や兵卒も大いに動員され、政府の牢獄の事務も忙しく、始めて隸書が使われ、事務の迅速化を図った。そのため古い字体が絶えたのである。)

第3節 漢字の構成 字形、字音、字義

1, 字形

漢字は六つの造字法があり、この六つの造字法を「六書」と呼ぶ。「象形」造字法、「指事」造字法、「会意」造字法、「形声」造字法、「転注」造字法、「仮借」造字法がこの六書である。しかし、学説によっては、この「六書」を更に二種類に分けて考える人もいる。象形、指事、会意、形声の四つは造字法とし、転注、仮借の二つは用字法とする。

(1)「象形」造字法。「象形」とは、物の形をそのままかたどり、絵画的に漢字を作る方法を指す。漢字をつくる基礎となっている。日、月、雨、水、木、牛、羊などのような文字がそれである。「日」は太陽の形を、「月」は月の形をかたどって、造ったのである。

(2)「指事」造字法。「指事」とは、形にあらわせない抽象的な事柄を、記号で表す漢字の造り方を指す。上、下、三、天、本、甘などの文字がそれである。棒線「一」の上は「上」の意味を、棒線「一」の下は「下」の意味を表す。「甘」は口の中に点を入れて構成しているが、その点は甘いものを意味する。

(3)「会意」造字法。「会意」とは、二つ以上の文字を組み合わせて別の新しい概念を表す漢字の造り方を指す。比、林、看、森、見、休、苗などの漢字がそれである。人を二人並べて(比)「比較」の意味を表し、木の字を二つ並べて(林)「はやし」の意味を表す。手を目の上に置き、日差しを遮って(看)「見る」の意味を表す。田んぼの草は「苗」の意味を表す。

(4)「形声」造字法。「形声」とは、意味をあらわす文字と、音を表す文字を組み合わせて、漢字を作る方法を指す。漢字の八割以上はこの方法で作られている。河、洋、霧、睡、固、枯、

娶，姑などの漢字がそれである。「河」の場合には意味を表す形は「水」にあり，音を表す漢字は「可」である。「睡」の場合には音を表すものは「垂」であり，意味を表す形は「目」にあり，まぶたが垂れ下がってくると，眠ることになる。

「形声」字は圧倒的に多い。殷時代には「形声」字は当時の漢字の20%程度だったが，漢時代の《説文解字》字典に収録した「形声」字はおよそ全漢字の80%を占めている。清時代の《康熙字典》の「形声」字は90%も占めている。

「形声」字は大体次の六種類に分類することができる。

左は「形」，右は「声」。談，肝，租，灯，鉦などがそれである。

右は「形」，左は「声」。都，切，攻，戦，視などがそれである。

上は「形」，下は「声」。芳，竿，宇，露，翠などがそれである。

下は「形」，上は「声」。型，貸，袋，姿，勇などがそれである。

外は「形」，内は「声」。閤，圍，匣，府，固などがそれである。

内は「形」，外は「声」。問，聞，辯，瓣，悶などがそれである。

(5)「転注」造字法。「転注」造字法については学説によってはかなり意見が分かれている。字義の「転注」と解釈する説もあれば，字形の「転注」と解釈する説もある。意味の「転注」と解釈する場合は，「本来持っている意味を発展させ，他の意味に転用することを指す，転注文字は，本の意味が変化して他の意味にも使われるようになったものである，意味の転化によって，互いに注釈しあえるようになったこ

とばのことである」と一般的に説明する²¹⁾。例えば，「楽」(らく)は，「おんがく」の意味から，音楽が人を楽しませるということで，「たのしむ」という意味が新しく加えられた。このような「転注」法は厳密に言えば，造字法ではなく，用字法なのである。

一方，字形の「転注」と解釈する場合は，《説文》に取上げられた「考」「老」の二文字を代表的な例として説明する。最初に「老」という字があって，後に「老」の下の部分を変えて「考」という字を作った。造った当時の「考」の意味も「老」と同じである。このような造り方が「転注」造字法という。「転注」のこの解釈は古くからあった古典的な説明である。字形の「転注」は次のような五つのパターン²²⁾がある。書き方を変える。例えば，「老」と「考」。画数を減らす。画数を増やす。例えば「大」と「太」。左右の方向を入れ替える。例えば，「从」と「比」。上下の向きを逆さまにする。例えば，「首」と「𦣻」。

(6)「仮借」造字法。「仮借」とは，「同音異義の字を借りて別のことばを表すことを指し，或いはもとの意味に関係なく，音だけを借りてきて同じ発音の別のことばをあらわしたものである」と一般的に説明する。《説文》には「本無其字，依声託事。(本その字無く，声に依りて事を託す)」と書いてある。もともと表す字がない。同音の既製の文字を利用して表現する。例えば，県長官は「県令」，「県長」と呼ぶ。命令を出すという意味の「令」と，末永いという意味の「長」の字を借りてきて，県長官を表す文字とした。《説文》には更に「西，鳥在巢上也，象形，日在西方而鳥西，故因以為東西之西。」，「朋，古文鳳，象形，鳳飛群鳥從以万数，故以為朋党字。」とある。「西」はもと

もと鳥が巢の上にいる象形文字で、日が西方になると、鳥がねぐらに帰す、故に東西の西と為す。「朋」は「鳳」の古文の字形で、象形文字である。「鳳」が飛ぶと群鳥が従い、万の数で数える、故に朋党の字と為す²³⁾。「北」という字は、もともとは二人の人が背中合わせになっているのを描いたもので、「背」という意味だった。それがのちに借用されて方向を示す「北」になった。そこで仕方なく「背」という字をつくり、「北」の字の本来の意味を表すことにした。だから「北」の字は「仮借字」といわれるのである。

「亜米利加(アメリカ)」、「巴里(パリ)」、「克林頓(クリントン)」なども仮借字である。

字形で分類する代表的な字書は次のようなもの²⁴⁾がある。

《説文解字》後漢・許慎著 西暦100年頃成立
収録字約9400字

《字 林》西晋・呂忱著 西暦280年頃成立
収録字約13000字

《玉 篇》梁・顧野王著 西暦543年頃成立
収録字約17000字

《龍龕手鑑》宋・行均著 西暦997年成立
収録字約2700字

《類 篇》宋・司馬光著 西暦1069年成立
収録字約31000字

《五音篇海》宋・韓孝彦 西暦1208年成立
収録字約55000字

《字 彙》明・梅鷹祚著 西暦1615年成立
収録字約33000字

《康熙字典》清・張玉書著 西暦1716年成立
収録字約47000字

《漢語大辭典》徐中舒主編 1986年
収録字約56000字

《中華字海》冷玉龍主編 1994年

収録字約85000字

2. 字音

漢字の発音は地方によって、時代によって様々である。同じ漢字を北の北京、南の香港、東の上海、西の四川それぞれ違う発音をする。当然同じ漢字の古代音と現代音が違う。しかし、漢字の発音は時代が違ってても地方が違ってても基本的な性格がある。これは「一漢字一音節」である。一つの漢字は様々な地方で様々な発音をする。何十種類の発音があるかもしれない。しかし、たとえ何十種類があるとしても、「一漢字一音節」の基本原則が変わらない。一音節は基本的には子音、母音、声調が含まれる。その中の母音と声調はなくてはならない構成要素である。子音がなくても音節が成り立つ。母音は一個だけの単純母音と、二個または三個を組み合わせて合成した複合母音がある。声調は基本的には四つであるが、地方によっては五つ、六つの場合がある。

漢字の発音は時代と共に変化してきた。漢字音の歴史は一般的に大きく上古音、中古音、中世音、近代音に分けて考える。上古音は資料が少ないため、中古音などに比較して研究がやや遅れているのが現状である。中古音の研究は最も進んでいると言われている。

古代中国では漢字の音を表示するには、「読若」法、「直音」法が最も古い方法である。「読若」法、「直音」法とは、ある漢字の発音を、同音の漢字若しくは音が似ている漢字で表示する方法である。この「読若」法は簡単であるが、表示できる漢字の量は限度がある。そこで発明されたのは二文字を用いて音を表示する「反切」という方法である。

「反切」法では二漢字を使い、二文字の半分ずつを切って、合成して別の漢字の音を表示す

る方法である。「反切」法は中国語の音節の特徴を生かした方法である。中国語の音節は子音、母音、声調で構成するのが特徴だから、一文字を使って子音を表示する。もう一文字を用いて母音を表示する。例えば、「東」という漢字の音は「徳紅切」となる。「徳」の子音の部分「d」を切り、「紅」の母音部分「ong」を切り、新たな音節「dong」を合成して「東」の音を表示する。「反切」表音法は「読若」法より優れ、あらゆる漢字の音を表示することができるようになり、古代中国の人々にとっては画期的な発明であったに違いない。長い間この「反切」法が使われてきた。しかし、「反切」法を利用するには一定数量の基本漢字を覚えなければならない。もう一つの欠点は使うときには表示される漢字の音を正確に把握しにくい場合がある。

清末に大量の西洋人が中国に入り、中国語習得のためにローマ字を使ったりしていた。それをきっかけに漢字の音表示の議論が盛んに行われていた。1892年にはローマ字をもとにした「切音新字」という発音記号体系が提案された。以後、多くのアイデアが提案されたが、もっとも広く行われたのは1900年に完成した王照の「官話合声字母」²⁵⁾だった。やがて1913年に「読音統一會」が召集され、1918年には漢字の発音符号である「注音字母」が公布され、台湾では現在も広く使われている。「注音字母」は全部で40個があり、漢字の部首を改造したようなもので、日本語の片仮名に似ている。その後、1958年には中国本土では「漢語拼音方案」が公布され、中国式のローマ字であるピンインが使われるようになり、このピンイン表記は1977年から国連においても中国の地名や人名を書き表す場合の標準となった。たとえば、「北京」のピンインローマ字表記では「Peking」

ではなく、「Beijing」となる。

中国語の最も古い韻書は西暦220～265年魏国時代の李登が著した《声類》と、西暦265～316年の西晋時代の呂静が表した《韻集》であると言われている。残念ながら両書とも失われている。その後《四声譜》など多くの韻書が著されたが、その集大成として《切韻》が造られた。《切韻》は隋の601年に陸法言によって編纂されたものである。その後400年以上にもわたって、広く詩文の押韻の規範を示す韻書として重んじられた。《切韻》は約12000字を収録したと言われている。1008年陳彭年は勅命を受けて《切韻》の最終増訂本として《広韻》を編纂した。《広韻》は約27000字を収録し、平声、上声、去声、入声四つの声調別に分けられている。漢字の音は「反切法」、「直音法」で注されている。中国語の音節を図表で表すのが音図である。最も古いと言われている音図は1161年に張麟之が作った《音鏡》である。《音鏡》は《広韻》の206の韻を43枚の図で表している。縦軸には子音（声母）が置かれている。子音は、それを発音する時の位置によって、唇音、舌音、牙音、齒音、喉音、半舌音、半齒音の七音に分けられている。横軸には韻が置かれている²⁶⁾。

3, 字義

漢字は意味を表している。漢字の意味を確定する時にはやはり最も古い字書《説文解字》に依拠することが多い。《説文解字》に載っていない字は他の古い辞書に依拠する。例えば、《字林》、《康熙字典》などを使う。漢字の意味は時代と共に変化するが、激しくはない。二千年前の文章でも現代人が基本的に意味が理解できるのは漢字の基本的な意味があまり変わっていないからである。その上、古代の文章は一文

字が一語彙となっている場合が多いことも原因の一つである。しかし、現代中国語では一文字の語彙よりも二文字の語彙が圧倒的に多い。二文字語彙の創出はしやすいので、時代の新しい事柄は新二文字の語彙を創出するか、既存の二文字語彙に新しい意味を付け加えるかによって表される。

第4節 漢字の表意機能と表音機能

中国の漢字は表音文字ではなく、表意文字であるとよく言われているが、しかし、漢字は決して表意だけの文字ではない。表音機能もかなりある。漢字は表音文字ではなく、表意文字であるという表現は正しくない。漢字の中に表意だけの文字は少ない。意と音の両方を表す漢字は圧倒的に多い。甲骨文時代には意だけを表す漢字は多くて80%ぐらい占めていたが、許慎編纂の《説文解字》時代には意だけを表す漢字の増加は鈍くなり、意と音の両方を表す漢字「形声」字が急速に増加した。《説文解字》に収録した漢字は9353字だが、その中の「形声」字は7697字で、およそ全体の82%を占めている。清時代の《康熙字典》に収録した字は47035字だが、「形声」字は42300字で、90%近くを占めている。この二冊の代表的な字典が示しているように中国語の漢字は決して意だけを表す文字ではなく、意と音の両方を表す文字である。従って、中国の漢字は表意文字でもなく、表音文字でもなく、「意音文字」である。「意音文字」で呼びたい。「意音文字」で呼んだ方が現実に近いのだ。

第5節 漢字による文化の伝承

漢字は意と音を表す文字である。そのため、二千年前の文献でも現代人は基本的に読めるの

である。漢字はこのような性格を持っている。この漢字の性格を利用して中国の伝統思想、歴史、価値観、社会制度、宗教、生活様式、科学知識などの文化を伝承させている。現在保存している中国の古代書籍は15万種類以上もあると言われている。例えば、《四庫全書》はその代表的な書籍の一つである。《四庫全書》は乾隆帝時代の1773年から10年間をかけて編纂した古代の主要書籍の集大成である。3503種類の書籍を集め、「経」、「史」、「子」、「集」四部に分けて79337巻に編纂した。《四庫全書》の目録は次のようである。

一、経部

1 易類, 2 書類, 3 詩類, 4 礼類(周礼之属・儀礼之属・礼記之属・三礼総義・通礼之属・雜礼書之属), 5 春秋類, 6 孝経類, 7 五経総義類, 8 四書類, 9 楽類, 10 小学類(訓詁之属・字書之属・韻書之属)

二、史部

1 正史類, 2 編年類, 3 紀事本末類, 4 別史類, 5 雜史類, 6 詔令奏議類(詔令之属・奏議之属), 7 伝記類(聖賢之属・名人之属・総録之属・雜録之属), 8 史抄類, 9 載記類, 10 時令類, 11 地理類(宮殿簿之属・総志之属・都会郡県之属・河渠之属・边防之属・山水之属・古跡之属・中外雜記游記之属), 12 職官類(官制之属・官箴之属), 13 政書類(通制之属・儀制之属・邦計之属・軍政之属・法令之属・考工之属), 14 目録類(経籍之属・金石之属), 15 史評類

三、子部

1 儒家類, 2 兵家類, 3 法家類, 4 農家類, 5 医家類, 6 天文算法類(推歩之属・算書之属), 7 術数類(数学之属・占候之属・相宅相墓之属・占卜之属・命書相書之属・陰陽五行之属),

8 芸術（書画之属・琴譜之属・篆刻之属・雑技之属）、9 譜録類（器物之属・飲饌之属・草木禽魚之属）、10 雑家類（雑学之属・雑考之属・雑説之属・雑品之属・雑纂之属・雑編之属）、11 類書類、12 小説家類（雑事之属・異聞之属・瑣記之属）、13 釈家類、14 道家類

四、集部

1 楚辞類、2 別集類、3 総集類、4 詩文評類、5 詞曲類（詞集之属・詞選之属・詞話之属・詞譜詞韻之属・南北曲之属）

中国の文化は漢字によって延々に伝承されている。漢字は中国文化の伝承に極めて大きな役割を果たしている。漢字があってこそ、中国の文化は場所、時代にこだわらず延々に伝承されたのだと言える。

（次号に続く）

注

- 1) 真田信治他著、『社会言語学』桜楓社 1992、P185-187の「海外における社会言語学の動向」の「史的発展」では、次のように書いてある。「ここでは、そのような科学としての社会言語学の史的発展過程を、黎明期（-1660年）、確立期（-1970年代前半）、発展期（-1980年代前半）、統合・反省期（-現在）のようにわけて振り返ってみる。（1）黎明期。現在の社会言語学の流れ込む研究が散発的に行われて時期である。この時期には、バイリンガルや言語接触の問題を取上げたWeinreich（1953）・Haugen（1956）、言語変種に注目したFischer（1958）などが著されている。それ以前の伝統的な方言学や、BoasやSapirの系統を引く文化人類学、Durkheimらの社会学からのことばへのアプローチ、プラーグ学派の機能主義的言語観も、広い意味ではここに位置付けることができよう。（2）確立期。社会言語学はこの時期、（ア）それまで抑圧されていた人々（黒人や女性・植民地の人々など）の解放運動の盛り上がりという社会的背景と（イ）

チヨムスキーら生成文法家達の均一性homogeneityの仮説・言語的運用側面の無視といった研究方針に対する反動という言語学的背景のものと確かな基盤を固めるに至る。（3）発展期。続く発展期は、上にあげた独創的な研究が、一方では修正を施され、また他方では理論的に精密化された時期である。そのような議論が展開される場として、いくつかの社会言語学専門誌が発刊された。（4）統合・反省期。この時期の特徴は、高度に専門化されて相互の関連が掴みにくくなった社会言語学の下位分野を見渡すために展望的な論集が刊行されたことにある。van Dijk（1985）やAmmon et al（1987-8）などがそれである。」

- 2) R.Aハドソン著、松山幹秀訳 『社会言語学』未来社 1988年 P9-12では、「社会言語学は、言語を社会との関連の中で研究することだと定義できる。……社会言語学は、主として1960年代後半から1970年代初頭に至る時期に成長・発展したのであるから、非常に若い学問分野である。とは言っても、社会との関連の中で言語を研究することが、1960年代に起こってきたというのではない。それどころか、方言研究や、ことばの意味と文化との関連についての一般的な研究には長い伝統がある。そしてこれらは、現在の定義によれば社会言語学とみなされているのである。何が新しいのかと言えば、社会言語学への関心が広範囲に及ぶようになったことと、言語の本質と社会の本質の両方の面にこの学問が多くを光を投げかけることが理解されるようになったことである。……社会言語学に対する関心がここ十年の間に高まってきたのは、書齋から理論化から得られた成果のためではなく、体系的に調査遂行の中で実証的な発見が幾つもあったためである。一例をあげると、アメリカはイギリスより階層意識がはるかに薄いというイメージがあるにもかかわらず、アメリカにおいてもイギリスと同様に、社会的階層の差はことばの中に明確に反映されているとの発見がなされたのである。……社会言語学と言語学の違いがあるのか、もしあるのなら、その違いは何であるのかをとうことは意味がある。広く

支持されている通説によれば、両者の間には違いがある。言語学は言語の構造だけを考え、言語が習得・使用される社会状況を考慮しないという点で、社会言語学とは異なるというのである。」

3) 同2)のP14では、「私は、社会言語学を<社会に関連して言語を研究する>と定義した。社会言語学の価値は、言語一般の本質や、ある特定言語の特徴を明らかにすることにある。当然のことながら、社会を研究する人々も言語に関する諸事実が彼らの理解を大いに助けうることに気づいた。結局のところ、社会の属性の中で言語以上に弁別的で、かつ社会の機能にとって重要なものが他にないと想定することは難しいのである。<言語に関連して社会を研究すること>が言語社会学the sociology of languageと通常呼ばれているものの定義である。」

4) 学会のホームページ <http://www008.upp-so-net.ne.jp/jass/shusi.html>では初代会長の挨拶は次のように述べている。「各研究者はこの学会のもとに集い、伝統的な学問領域を出発点として自由に研究を展開しつつ、ある時は既成の学問領域から解放されて、関連領域との交流を盛んにし、その刺激と緊張とを研究発展の契機としていきたいと考えるのです。幸いにこの学会はすでに会員数300名を超え、この第1回の創設大会は、多くの人たちの力によって予想以上に内容豊かなものとなることができました。学会誌刊行の計画も着々と進行しております。嬉しい限りであります。そしてこの勢いを今後とも助長していきたいと考えます。

いわゆる学際的研究は、従来既成の学問領域の周辺部分として位置づけられることがありました。他方、学問研究には、いわば余計な部分を切り捨てて、独自の整然とした体系の確立をめざす方向があります。これは、適切な比喻ではないかもしれませんが、単一民族国家の建設になぞらえることができそうです。これに対してわれわれは、あえて多くの学問領域にわたる、単なる学際研究ではない、トランスディシプリナリーなユニークな学問の多民族国家、学問の共和国の建設をめざしていると言えるでしょう。

したがって、学会の運営も、各学問領域の自立性を尊重しつつ、一方、共和国の利点を追求する方向に持って行くべきだと考えております。

そうはいつても、学会の前途はかならずしも安泰ではないと想像しております。学会の外側には、既成の学問領域がそれぞれ厳然として存在し、またそこに安住しようとする人も、実は結構多いのです。また研究に対する基本的なスタンスについても、それぞれ別々に発展してきた学問領域ごとにかなり違っているようです。共和国における分裂の危機は、はじめから内包されているとっていいでしょう。しかしわれわれは、コミュニケーションないしは言語を鍵と見定めて、異質なものとの共生の可能性を確信し、工夫と努力を積み重ねることによって、困難を克服していこうと考えております。そして会員のみなさんのお力によって、それが可能であると考えているのです。

さらに言えば、この学会では特に若い研究者の活躍に期待するところが大きいと考えています。若いとは必ずしも年齢のことを言っているわけではありません。頭のこりがたまっていない、柔軟な、将来の発展が期待できる人といいかけていいでしょう。そしてその若々しい人たちがこの学会を跳躍台として巣立っていくようになれば、この学会の将来は、光に満ちたものになるに違いありません。そのこともあって、この学会の運営については、各会員の自由な発想が基盤になるよう、考えていきたいと思っております。多くの同志の積極的な参加が期待される所以です。われわれの前途には、広大な未踏の世界が広がっていると考えます。そして新しい学問の地平を拓きたいものと願っております。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

なおこの「社会言語科学会」の発足に伴って、1994年に発足した社会言語学研究会は、発展的に解消することになります。また1987年に発足した日本言語学会に付随して開催されてきた社会言語学ワークショップは、すでに1997年6月をもって幕を閉じていることを申し添えます。」

5) <http://www.sangensha.co.jp/>

6) 『ことばと社会』三元社、1999年。創刊号の

創刊のことばでは、「近代国家はその形成期において、人々を国家の中心に向かわせる流れを生み出した。これはたんに中央集権という政治的な次元の話ではない。人の流れであり、意識の中での指向性の問題である。ことばから見ると分りやすい。つまり近代国家という時代的な枠組の中で方言から標準語へ、複数の言語から単一言語へ、雑多な言語から均質な言語へという流れが造られてきた。それがあべき姿、当然の方向性と思われたのである。それがいまや逆の方向へ向かう流れがある。ことばの面では、方言や少数派言語、雑多な言語の復権が話題になる。多文化主義・多言語主義が語られている。ここに私たちは立っている。しかし、その具体像はいぜんおぼろげなままだ。これを究明することが私達の課題である。」

- 7) 陳原著、『社会言語学』学林出版社 1983年
 8) 陳松嶺著、『社会言語学導論』北京大学出版社 1985年
 9) 陳述著、松岡栄志訳、『中国のことばと社会』大修館書店 1992年。日本語版序ではこう書いてある。「この書物（ことばの森の中で）は1991年に出版され、ことばに関するエッセイを201条収めています。いずれも88年から90年にわたり、休むことなく書かれたものです。初めの100条は、国内外にとりわけ影響力をもつ雑誌『読書』（生活・読書・新知三聯書店発行）に連載され、思いがけず大変多くの読者の関心と共感を得ました。これらのことばのエッセイは、現代中国語（とくにその語彙）の社会的意義を研究したノートであり、言語の変異と発展を扱っています。さらにそれを通じて社会生活の律動（rhythm）と変化を眺めたものです。したがって、この中にはかなり風刺のきいたものや世の中の悪しき傾向を叱責したものが含まれています。私は、一人の社会言語学研究者として、語彙は言語の中で最も活発な成分であり、だからこそ最も敏感に社会生活を反映すると考えています。語彙は社会生活の鏡である、時代精神（西洋学術界でいうZeitgeist）を映し出す鏡なのです。私はこの観点から、現代の社会言語学研究者の基本的な観点であるべきだと思っています

す。……新語（neologism）の出現は、生きている言語つまり生命力のある言語が必ず発生させる言語現象です。これは、生きている言語が全体のバランスをとるための、一種の新陳代謝のプロセスなのです。私は、18-19世紀に流行した「言語は一種の有機体である」という学説に従うつもりは全くありません。しかし、人間社会の最も重要な交際手段（メディア）としての言語が、いつも全体のバランスを取ろうとしていることは認めます。人為的な要素が、時にはこのプロセスを加速させたり阻止したりします。」

- 10) 陳建民著、『中国の言語と中国の社会』広東教育出版社 1999年
 11) 林宝卿著、『中国語と中国の文化』科学出版社 2000年
 12) 游汝傑著、『方言と中国文化』上海人民出版社 1986。羅常培著、『言語と文化』語文出版社 1989。陳建民著、『言語・文化・社会の新探』上海教育出版社 1989。刑福義編、『文化言語学』湖北教育出版社 1990。申小龍著、『中国文化言語学』上海人民出版社 1990。郭錦桴著、『中国語と中国の伝統文化』人民大学出版社 1993。常敬宇著、『中国語の語彙と文化』北京大学出版社 1995。張紹滔著、『中国語と文化の研究』アモイ大学出版社 1996。『新版社会言語学の方法』ブリギッテ・シュリーベン＝ガング著、原聖他訳 三元社 1996年。『言語研究の方法』J.V.ネストプニー、宮崎里司著 くらしお出版 2002。『言葉の社会学』松島浄他著、世界思想社 1982。
 13) 徐中舒主編《漢字大字典》四川省辞書出版社・湖北省辞書出版社 1986年
 14) 冷玉龍主編《中華字海》中華書局 1994年
 15) 劉国恩著《漢字文化漫談》湖北教育出版社 1997年、P18
 16) 「許慎（58～147）、経書学者、文字学者。字は叔重。河南省の人。『説文解字』、『五經異義』などを著す。」『辞海』P469による。
 17) 「王懿榮（1845～1900）福山人。字は正儒。廉生または蓮生と号し、居を天壤閣という。進士から国子監察になった。義和団事件のとき、宮廷の大臣たちが多く西安に逃亡したが、防御

- に挺身し、やがて衆費えて万事窮し、妻謝氏とともに毒をあおぎ井に投じて殉じた。文敏と諡される。その学は尚書に深く、やがて金石学に専念し、最後に甲骨を収得した。」李学勤著・小幡敏行訳《中国古代漢字学の第一歩》凱風社 1990, P61による。
- 18) 『欽雲蔵龜』, 清末の劉鶚(字は欽雲)著。光緒29年(1903)石版印刷本。五千余点の甲骨文字の中から1058点を選び、甲骨文字の最初の本にした。『辞海』P2064による。
- 19) 「毛公鼎」, 西周晩期の青銅器。清末道光28年(1841)陝西省岐山県で出土。銘文497字が刻まれ、周王が周朝復興に功勞があった毛公一族を称えたものになっている。銘文最長の鼎。台北故宮博物館収蔵。『辞海』P1759による
- 20) 李学勤著・小幡敏行訳《中国古代漢字学の第一歩》凱風社 1990 P112 - 136。
- 21) 阿辻哲次は《漢字講座第一巻・漢字とは》P65で次のように述べている。「《説文》の「考」「老」の挙例を定義の分析に基づいて考察した結果、最も明快に導き出されるのが互訓の方法であるなら、それが六書の転注と考えるべきであろう。六書が成立段階では、既に莫大な量の漢字が使われていた。漢字はその段階までに中国の様々な時代にいろいろなところで作られてきたものの総体であるから、重層的な構造をもっており、形としてはいくつもの種類があるが、意味はほぼ同じの、つまり「同義字」をその中に多く含んでいた。その同義の文字群を一系統にまとめる方法が互訓、つまり転注という考え方だったのではないか。」
- 22) 聶鴻音著《中国文字概略》語文出版社1998, P109 - 110。
- 23) 佐藤喜代治編《漢字講座第一巻・漢字とは》明治書院 1985, P63。
- 24) 大島正二著《漢字と中国人》文化史を読み解く 岩波書店 2003, P89。
- 25) 「官話合声字母」, 王照氏が日本語の仮名を倣い、漢字の一部をとって音を表した。「喉音」と呼ばれる韻母12個, 「音母」と呼ばれる声母50個を定めた。北京音を標準音とした。1900年から中国の北方で10年間試用したが、「拼音官話報」が摂政王の恨みをかったため、1910年に使用禁止となった。『辞海』P1228による
- 26) 大島正二著《漢字と中国人》文化史を読み解く 岩波書店 2003, P176 - 178。

Chinese Language, Culture and Society

WEN Chuxiong *

Abstract: Like the society it reflects, language is a living thing. In any society, language always reflects contemporary life and is influenced by social change. Language has a close relationship with the cultural context in which it is used: it is a mirror of culture and society. A society's thought, religion, values and lifestyle can all be investigated through language. From such a perspective, this research considers the complex relationship between language, culture and society in China. Through the framework of language, it analyzes the social changes still being undergone by China's ancient culture, focusing on a study of the new words, popular expressions and 4-character collocations and idioms currently being used in everyday Chinese life.

Keywords: tradition of Chinese culture, Hu Jin tao, the sociology of Language, Japanese Association of the Sociolinguistic Sciences, inscriptions on animal bones and tortoise carapaces, methods of character formation, the meaning and sound of a character

* Professor of the Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University